

陶芸の魅力伝えたい

ひと



開田村には県外から来られた
Iターン者と言われる方が大
勢住んでいます。今回は、昨
年、工房「つちのこ」をオー
プンした陶芸家、Sさん
を紹介いたします。



Sさん夫妻 (西野 下条)

「今でも焼き上げた窯のフタを開けるときのには、初めてのような期待感で胸がドキドキします」というSさん。サラリーマンから陶芸家に転職し、すでに25年が経過しました。奥さんは自然が大好きで、野の花を使ったリース作りを得意としています。

平成12年、末川に空き家を借りてまず奥さんが引っ越し。Sさんも一緒に来たかったのですが、川崎で創作活動のかたわら陶芸教室を持つていたため二人そろって来ることはできませんでした。この間、Sさんは川崎と開田を行ったり来たり状態が続き、奥さんも大変苦勞しました。

そして昨年、旭ヶ丘に念願の住居が完成。窯を備えた工房「つちのこ」もオープンし、Sさんもようやく開田へ居を移し、二人の新たな生活が本格的にスタートしました。

Sさんは現在、一番使い易いという滋賀県信楽の土を使い焼き物を行っています。「土を練って形を作り、それを乾燥させる。そして低い温度で素焼きを行い、絵付けを施し釉薬をかけた後、高い温度で本焼きを行う」これが焼き物の一連の流れですが、やはり一番大切なことは土と釉薬とその焼き方。「自分の作りたいたいという目的に合った土を選び、上薬との相性を確かめ、そしてそのものにふさわしい焼き方をするのが非常に重要で、このうちどれが欠けてもいい焼き物はできません」と話に熱がこもります。



奥さんの作品



Sさんの作品

鉢、皿など日常の生活の中で気軽に使ってもらえるような品々が中心で、一気にたくさんものを作る時もあれば、アイデアが浮かばなければ全く作らないときもあるといいます。作ったものは工房に展示し販売していますが、今年のシーズン中は地元の人や観光客、別荘客などいろいろな人が見に来てくれました。中には「買って行ってさっそく家で使ってみたら、使い易かったのだから、

呼んだらいいのでしょうか」と質問すると、「土は信楽を用い、上薬は自分で調べたものを使い、そして焼くのは開田村。こういう場合はどうなるのでしょうか」と、反対に質問が返ってきました。

開田で1年余りを過ごし、向こうにいたときは事情が違っても痛感していますが、その一つが開田の寒さ。「昨年は粘土が凍ってしまって戸惑いましたが、今はこの経験を踏まえ粘土が凍らない工夫をしています」
Sさんの焼き物は、茶碗や小

夢が膨らんでいます。